



episode.03

無農薬の白川茶園

話し手 白川茶園 代表取締役
しらかわ みつひで
白川 満秀さん (昭和22年6月28日生)

聞き手 鹿児島県立屋久島高等学校 1年
 今田 聖愛 上村 結愛
 濱崎 裕 安藤 菜依

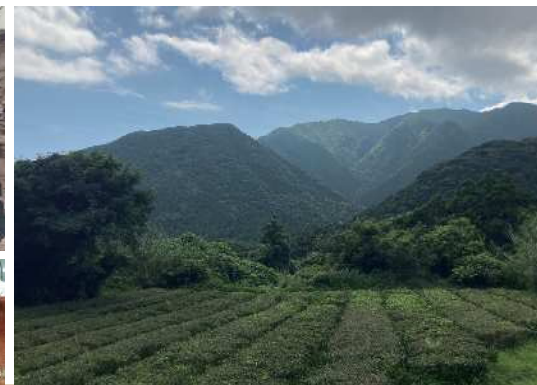
「屋久島の空気を吸う」

僕は白川満秀と言います。僕はここで生まれ、高校を卒業して、東京に行き25歳で会社を作ったんですが、勢いで結構うまくいきましたね。僕は、東京で少しぐらい成功しているかもしれないけど、地元の人たちのように屋久島の空気を吸っていないじゃない。みんな一生懸命暮らしていて、大変なんだろうと思います。屋久島が自然からどんどん切り離されてセメント化していつているようで、それはやめたほうがいいんじゃないかと思う。

「お茶づくりのきっかけ」

世界遺産の屋久島ですから、中途半端なやり方ではだめです。徹底して世界遺産屋久島と対峙しようと思いました。まあ、我々が自然に勝てるわけがないんだから、ある程度、屋久島の恩恵をもらいながら、屋久島に迷惑をかけない。今でいうSDGsの発想は、最初から屋久島にあると思いました。僕は屋久島の森を信じて、化学肥料を使わず有機栽培でお茶を育てていますが、最初から悩みつてなかったんだよね。

無農薬のお茶作りを始めようと思ったきっかけは、飲んでもらう方に体にいいものを飲んでほしい。悪いものを入れたんじゃ、逆に迷惑なんじゃないか、失礼なんじゃないか、と思ったからです。それから、屋久島をアピールするために、屋久島の水を使ったお茶を飲んでもらう。水は、我々が生きていくために必要不可欠だし、きれいな水がたくさんある屋久島をアピールするには、素晴らしい天然資源だという気がします。



「仕事は一生懸命、そして楽しく」

この仕事をしていて大変だと思うことは、草取りです。有機栽培なので、除草剤とかをまけないから手で全部やらないといけない。だから、毎日草との闘い。除草剤をかけるのとでは手間が100倍違う。でも、逆のことも考えるわけね。草はなくなって、きれいになったって思うでしょ？だけど、いい土にいるはずのミミズはなくなってんじゃないかって。逆に楽しいと思うことは、一番茶が取れたら飲むこと。いいお茶は飲まないといけないからね。種子島はいいものを全部売っちゃって、家とかでは、茎茶とか、あまりよくないお茶を飲むみたい。

お茶っていうのは、枯れても残っているものに、「美」がどういう風に映っているかを味わうものだから。甘味とかじゃなくて、「くみ（苦味）」。化学肥料をやっているところは、えぐみ、しょっぱみがある。

お茶作りのこだわりは、世界遺産の屋久島といかに共生していけるかということ。だから、よそ様に出来ないものを私は作りたいと思う。普通の人よりも、リスクを感じながらやっていくっていう勇氣も必要だと思うね。

「土へのこだわりとみんなの幸せ」

土にもこだわりはありますよ。土の中にも、いろいろな生き物がいますから、そういうのに、害を与えないようなものを使う。悪いものを使うんだったら、使わない方がいいと思う。有機栽培をすることで、他のお茶と比べても味や香りが全然違う。一番いいのは飲んでもらうこと。一つ一つ特徴を出すように、いいものをおいしく飲めるようにね。栽培しているお茶だけじゃなくて、山の木、野生にあるものを体に取り入れたらいいんじゃないかって。これからこうなりたいという希望はみんなの幸せだね。屋久島の人たちが経済的なものでもなくていいから、心でも、人格でもね。そういう時代になっていこうなって思う。

